

谷の町 史の里 図書館のあゆみ展

2006年10月28日〜11月9日

市立図書館・地域交流研究センター共催事業の報告

青池恵津子



図書館のあゆみ展から

戦前の図書館活動紹介

市立図書館のルーツをさぐる

都留市立図書館と地域交流研究センター・ワールドミュージアム部門は、2006年秋の読書週間にちなみ、市立図書館において、『谷の町 史の里 図書館のあゆみ展』を開催しました。

これは、現在の市立図書館に至る、戦前戦後のまちの図書館活動百年のあゆみを、写真や蔵書、文献・史料を使ってはじめて紹介したものです。

これまで、市立図書館の歴史について書かれた通史のような文献はありませんでした。そこで、図書館の沿革を調査するにあたっては、市民、郷土研究会会員、市史編さん関係者、県立図書館関係者等、多くの方々のご教示を得て、図書館が所蔵する市の発行物や市民の著作などから関連する記述をさがし、新聞記事、町役場の統計報告、図書原簿、関係資料等で裏づけをとりました。また、県の教育史や図書館史等により、日本の図書館運動や図書館史における位置づけ、歴史的背景を考察しました。

■床屋文庫―近代公共図書館活動の原点―

1914(大正3)年10月30日付の山梨日日新聞は、谷村町(現在の都留市中心部)の「床屋文庫」設立を次のように報じました。

「南都留郡谷村小学校附属図書館は床屋文庫なるものを設置し、町内信用ある床屋に対し文庫を貸与し立ち寄る者に閲覧の便宜を与へ、現在配送を受ける床屋七

軒あり……」

また、市内の小学校の歴史を詳述した『学校沿革史(一)』(中野八吾、1969)には、「床屋文庫は小箱に十数冊の小説類を入れたものでこれを一月単位で交換した」とあります。

この床屋文庫は、市立図書館の直接の前身とはいえませんが、コーヒーハウスに雑誌や本を置いた(社会教育の原点とも言われる)イギリスの例同様、理髪店という公衆の場で本を公開するという発想は、公共図書館活動の原点といえるべきものであり、市立図書館前史に位置づけられてよいでしょう。

「南都留郡谷村町明細地図実業家案内」に見る谷村町誌面背景のこの地図は、1916(大正5)年につくられた広告地図で、町内の商工業者について、店の屋号・営業品目、電話番号等を記しており、床屋文庫当時の谷村の町の様子を知ることができます。中央に馬車鉄道が走り、織物関係諸業、旅館、医院・病院、料亭、造り酒屋、牛肉・砂糖・醬油・茶・製菓ほかの各種専門店、銀行・金融機関が軒を並べ、弁護士・法律事務所、新聞社支局、さらに、書店も二軒見られ、郡役所所在地であった町場のにぎわいを伝えます。この町のあちこちに「床屋文庫」が置かれました。

谷村図書館―文化の摂取は読書から「葆光倶楽部」の活動―

明治32年の「図書館令」を受けて、大正年間には全国各地に「通俗図書館」(現在の公共図書館)が急増

しました。1927(昭和2)年6月、町の有志らが教育文化を論じ活動する「葆光倶楽部」(通称「葆光会」)は、「文化の摂取の実現は、読書に俟(ま)つべきもの……図書館を設立し現代文化の醍醐味を味わいたく」と趣意書^①を発表し、わが町にも図書館を、と町民に図書館設置の賛助をよびかけました。^②

『学校沿革誌(一)』(前掲)には、「学校にあつては一般町民に利用されないため……(谷村)小学校内にあつた日露戦役記念図書館^③を(仲町大神宮の公会堂に)に移し……谷村図書館と名を改め……と記されています。当時の関係者の話(記録)によれば、会員の出資により、幹事が東京へ出向いて図書を購入して、貸出等は青年が奉仕したとされます。また、同趣意書は、この図書館を「将来適当ノ時期ニ於テ町に寄附スル」と予告しています。市立図書館はこの谷村図書館の蔵書の一部を受け継いでいます。^④

このような、非営利団体が経営する図書館には、イギリスでは、読書による自己教育と国民的娯楽に因えるため、トマス・カーライルが提案したロンドン図書館(1841)があります。葆光倶楽部の活動はこれに通じるものがあります。

なお、昭和2年は、『岩波文庫』が創刊され、日本近代詩と近代音楽の巨匠・土井晩翠と山田耕筰が、谷村工高のために「山梨県立工商学校校歌」をつくつたとされる年です。

図書館のあゆみ展を開催して

戦後、日本の公共図書館は、教育基本法、社会教育法、図書館法の制定を経て、読書推進活動の中心的役割

割を担ってきました。都留市図書館もまた、市民や都留大生の読書と学習を支えてきました。

しかし、今、社会情勢や暮らしの変化、ITの普及等によって、図書館には多様な機能が期待され、活動の見直しや、民間への移行までも検討され、さまざまな意味で「変革」を求められています。

今回の『あゆみ展』は、図書館の存在と意義について考える機会となりました。わたしたちは、城下町として、地域の政治・経済・文化の中心として栄えたまちの文化的風土を大切に、先人たちの先駆的な活動に思いを寄せ、まなびのまちの伝統にふさわしい図書館のあり方を深く考えてゆくべきでしょう。

（あおいけ えつこ）都留市立図書館司書



写真上・谷村図書館がおかれた大神宮境内の谷村町青年会館、「公会堂」は通称か。(奥隆行氏所蔵絵葉書)
写真下・2002年リニューアルされた現在の都留市立図書館

◇誌面背面は、「南都留郡谷村町明細地図実業家案内」1916(大正5)年(資料提供：奥隆行氏)